



同窓會記事欄

(一)

惟ふに。人事の凡ては、何處迄も不如意
 で有るか、…時代の思潮も公論も、單なる
 空理、空論、空想として、時てふものより
 常に取り残されるので有る。タイム線上に
 立つて、過ぎにし去年を省れば、只時代の
 輿論として、流言として、又時代の謔物と
 して、改造てふ熟字が、此の宇宙に、遊動
 して居た耳であつた、未だ徹底的に、何等
 の改造も、見ないので無いか。嗚呼！
 現代の社會は、髓に靈的食物に餓えて居
 る。同時に肉的食物にも非常に、飢えて居
 るので有る。然し靈的食物に不足を告げな
 かつたならば、其處に精神的活動に因つて
 肉的即ち物質的食物を求め獲る事は必然的
 で有る。古人が「足衣食而知禮節」とて、先
 づ此の飢渴者に。パンと、水とを與へよ、
 と叫んだが、是れば要するに、精神的教養
 を充分にし、次に飽食の道を得たならば

禮義も知り、節操も重んずる事が、出来る
 ので有る。然し、現在に就けば、油なくし
 て機械の運轉は望み難い事は、事實で有る
 ……兎に角、社會は日一日と、複雑繁多に
 爲つて、行くので有る。随つて救護を求む
 る聲は、次第に凄しくなるので有る。吾人
 青年求道者の血肉は、常に恒に躍動して止
 まない。如何にもして、此の悚慄すべき場
 裡から、彷徨へる可憐の群羊を、花の園に
 導き出さなければならぬ、重且つ大なる
 責めを、吾人は有つて居るので有る。然し
 未だ、國家社會より、常に保護を受け、示
 導を待つ吾々は、只心計りあせつても、…
 …亦大なる希望は、不斷に把持して居ても
 手を出す事が出来ない。即ち自己を知り、
 自己を救ひ得ざる者が、如何して、化他の
 途につき得べき？
 所謂 宗祖の、「一丈の溝を越えざる者何
 ぞ十丈廿丈の溝を越んや」。…御訓示の如
 くで有る。吸收時代修養時代に在つては化
 他に出づるに害こそあれ、化益する所は、
 僅少で寧ろ信仰を冷ますの感が有る。然し

修養積み自行愈々到れば、踵々として實社
 會に溶入して、不自惜身命の活動を開始す
 る決心である。
 此の重疊せる源山に細い煙を立てる
 同窓會は來る年も…現狀維持の續では有
 るが、日に月に發展しつゝ、あるので有る。
 厭れも幸に、諸賢の御示導と、援助とによ
 るものと深謝する次第で有る。
 大正九年度に於ける總會は、四月廿八日
 の吉辰を卜して、開催した。主なる決議案
 は。總則第八條、講演部細則、第十條、第
 十五條(削除)及び、運動部細則第八、九、
 十條、並に文學部細則第九條、雜誌縱覽所
 規則第二條の、新加訂で有つた。五月廿五
 日より一週間、豆州相州方面に、修學旅行
 を行つた、…其の節、御芳志を忝ふした、
 各寺院並に、信徒各位に、銘謝致す次第で
 ある。七月に到つての學生大會、尤も同窓
 會の名目な離れて居るが、…學生一同慎重
 な態度で、親しく學院の發展策に努力した
 事は、既知の如くで有る。次に本學院校旗
 の樹立、…尤も本學院として、緊急問題は

夥多なるも、萬事が一時に實現する事は、猶木によりて、魚を求むるが如しで有る。校旗の如き、即ち學生の統一標的にして、且つ學院の生命である。故に、吾人は此の校旗の前に膝曲いては、自覺自重の精神を捧げ、而して勇往邁進すべき、前途を祝福するのである。此の開眼樹立式は昨秋紅葉色深き十月七日親く聖祖の御前に於いて舉行した。(紀念運動會開催)

此の大正辛酉は、世界的紀念歳で有る。故に何處迄も、有意義に送らねばならぬ。茲に吾同窓會も微力ながら衷心以て、聖祖の鴻恩に報ゆる爲めに、客歲十二月初旬以來聖誕奉祝紀念事業のため準備委員を選出し準備會を數回開いた。事業は、左の項目で有つた。

一、圖書閱覽所建設

一、祖山出身同志會創立(別項)

卷尾にあり)

一、雜誌棲神發刊(特別倍大號)

一、聖祖御肖像並に御眞蹟寄贈

及 頌布(各雜誌新聞社へ)

一、新聞傳導

一、宣傳布教

一、名土講演(招聘)

一、警告箋配布

一、當日校内慶讚裝飾

興餘 琵琶歌、茶番、以上

然し、一事業を遂行するのにも、源動力の問題で有る。遺憾ながら右項目中、圖書閱覽所建設、新聞傳導の二項目は、中止して是に代ふ可き、永久的事業を開始した。先づ其の基金積蓄方法として、勿論紀念事業で有るが、宗祖の御肖像を謹寫して、諸彦に分讓する事にした。……漸く發芽し始めた學院同窓會も、只自動的のみでは、到底覺束ないので有る。他動的大後援を仰ぐ次第で有る。思へ！五尺の小人、九層の臺を築く事あるを、！最後に祈る、四海歸妙の日近かん事を。因に大正九年度本會の役員は左の如し。

會長 小泉院長、現下

副會長兼會計監督 關本敬頭

運動部長 遠藤教授

主任幹事 小林貞宜

文學部長 宇田川教授

主任幹事 岡 觀修

講演部長 堀(龍)教授

主任幹事 結城瑞光

會計主任幹事 井上龍將

(已上嗚月記)

(二)

三月十七日には本學院第九回卒業式が行はれた、續いて講演部々長堀龍淳師留學生藤田光肇師並に卒業生諸君に對して送別茶話會が開かれた尙又同窓會幹事改選も行つた四月には制帽が改正された……私達若々しい然も緊張しきつた氣分を以て此の紀念大節を迎へる爲に演說や幻燈布教は勿論の事警告箋を配布してゐる又毎夜八時から身延街道に立つて道路宣傳をしてゐると熱心な人々が傾聴してくれるので誠に喜ばしい今回本山の大法要に登山された寺院方は私等の此の淨業に多大の讃同をされ中でも第

二會登山寺院方が發企となり岡山の高見僧正崎玉の富川僧正の御二方が種々幹旋の勞をとられ布教宣傳其他事業の補助費として金品を寄贈せられた(報告は天鼓紙上所載)に對して厚く感謝を表す、吾々は物質の多少を問はず學院將來の爲宗門前途の爲に應援して下さる先輩諸賢の好意は總て宗門中堅として活動する時其れが何よりの報恩であると信じてある益々自重し努力して如説修行の奮闘を休顯する事を誓ふものである終りに此の棲神が既に發行される筈であつたが種々の事情で延引した殊に大法要に懸がつたので思つたより遅くなつた事を不懸御諒察を願ひたい

因に本會の役員を記さば

- | | |
|--------|--------|
| 同窓會々長 | 小泉院長現下 |
| 同副會長 | 關本教頭 |
| 兼會計監督 | 結城瑞光 |
| 會計主任幹事 | 宇田川教授 |
| 文學部々長 | 森田一擁 |
| 同幹事 | 遠藤教授 |
| 運動部々長 | |

同幹事
講演部々長
同幹事、

富田海音
未定
江原亮勇

△文學部から▽

初鵝の一聲に、愈々聖誕七百の暮は開かれ、而も、天地の丕物をして、悉く靈化せしめんとするのである。嗚呼 意義ある大正十年、苟も本化末流に浴する吾人は、只無意味に、此の大節を慶祝する事は、吾人の内心、之を赦さない所で有る。即ち、是の紀念歳をして、有意義に暮した曉、いせめてもの事、大聖の鴻恩に、一微塵も報ひ得た、其處に於いて、始めて、祝福し且つ亦目出度けれの、眞義が現れるのでは無いか。茲に於いて、吾人特に青年求道者は、大なる自覺とそうして、強硬なる自信の下に、此の年をして、實際的に、意義あらしめればならぬ。

茲に吾同窓會文學部も、慶讃事業の一として、將又布教傳道の一として、雜誌棲神紀念特別倍大號を、發行する事にした。尤

も此の棲神は、毎年一回發行となつて、居るので有るが、内部の都合上、大正八九の二ヶ年は休刊した。故に會員諸彦に諒諾を乞ふ次第で有る。

幸ひに紀念事業の一として、同志會(別項にあり)なる者が生れた。是の會に依つて學院關係者諸賢と舊情を温め、且つ實狀を相通する好機會を多々ならしめんとするのである。特に此處に切望するのは、勿論會員及び、會友の親善を計る爲めではあるが、自今已後棲神發行に際して、其の人を問はず、原稿を賜り度ひのである。是れ、既に實踐場裡に在る諸賢は、寺門の經營、或は布教傳道の、經驗をされ従つて其れを披瀝されるならば其處に幾多の興味は味ははなる事である、後學の徒は、將來曲折波瀾の多い、大海を渡られねらわから希望するのである、諸賢幸に諒とせられよ。

次に此の雜誌棲神が讀者諸賢の、研究の一助ともなるならば、幸甚と謂ふべきであるが元來會報に過ぎないのであるから不備であるにも不關、購讀希望の申込みが、同

々あるが、年一圓の發行で、而も非賣品であるから、御希望の方は、御一報給らば、發刊毎に、送付する右御承知願ひたい。

欄筆に際して、失禮ながら本會へ、書籍雜誌等御贈與被下した諸彦に虔みて、感謝の意を表する次第である。

因に雜誌寄贈者の芳名を録さば。

- | | | |
|--------------|----|---------|
| 大崎學報 | 東京 | 日蓮宗大學殿 |
| 天業民報 | 同 | 天業民報社殿 |
| 日宗新聞 | 同 | 日宗新聞社殿 |
| 太陽、中央公論、大觀 | 同 | 望月軍四郎殿 |
| 雄辯。實業之日本。現代。 | 同 | 望月軍四郎殿 |
| 三寶 | 同 | 望月軍四郎殿 |
| 東洋哲學 | 同 | 森江書店殿 |
| 天鼓 | 千葉 | 佐藤慈典殿 |
| 宣明庵 | 同 | 天鼓社殿 |
| 唯一 | 大阪 | 丸山勝龍殿 |
| あさひ | 同 | 日蓮唯宗一團殿 |
| あさひ | 同 | あさひ社殿 |
| 唱導 | 同 | 唱導社殿 |
| 國教 | 朝鮮 | 國教社殿 |

- | | | |
|----------|---------|--------|
| 宗學雜誌 | 靜岡 | 高田惠忍殿 |
| 日宗青年 | 山梨 | 日宗青年會殿 |
| 脱苦 | 同 | 脱苦社殿 |
| 战友 | 本校 | 渡邊泰深殿 |
| 若人 | 東京 | 加藤安四郎殿 |
| 日蓮聖人百字讀傳 | 百五十部、靜岡 | |
| 傳道 | 靜岡 | 高田惠忍殿 |
| | 大坂 | 傳道閣殿 |
| | 己上 | 鳴月記) |

講演部から

古來思想表現の方法として採用せられ來つたものには辯論と文章との二つがある其の中でも辯論は文章に比して直接人心に訴へ直接の効果が得られる、此の事は議政上の大獮子吼克と一國の政治を左右するを見れば明らかである、殊に宗教家にありては其の思想發表の形式は辯論を以つて第一とする釋尊に於て已に然り宗祖に於ても又其れを見るされば正義の光明、人心の趨歸を啓示する本化門下にありては一曾に、辯論

の必要を認識せねばならぬ。巧言令色鮮無仁な教之訥言敏行不言實行を主張する思想に依つて嘲らされた道德律を以て自由民權を抑壓するが如きは社會的活動を第一義とする青年僧侶の憤慨に堪えざる所である、文化生活の今日個人的覺醒は人類共存の本義を闡明して暗黒なりし舊套の思想を一蹴し去り社會運帶の觀念に基礎付けて我に關する公平な且つ美しき樂園を人類の世界に創造せんとし、均等の機會を要求して止まないものである

如斯時代の趨勢は自由豁達に自己の所信を真劍に躊躇なく公明に發表すべきで其處に雄辯の生命が溢れ流れて居る、陰慘より明快に不純より純正に轉換する道程は言論の力に俟つ所多大である

是佛子說法 常柔和能忍 慈悲於一切 不生三懈怠心

安樂の行に修練せる大聖の雄辯は今仍は人類の覺醒を強要してゐる、聖誕重暉七百年 何と感銘の深い年ではないか

檀林當時の燈耀會が祖山學院講演部と改稱

されて既に星霜十年、不斷の努力は理想に現實に雄辯の華は咲き亂れ熱誠の炎は燃え上つていたのである、學院の充實と相俟つて講演部も社會的に順次發展して來た、因循姑息な制約より解放されて内部に深く潜んで居た延嶺の特長たる新しい氣分が遠からざる將來に於て實現される事と信する、

其の第一歩とも云ふべきが大正八年十月東京に於て開催された全國中學雄辯大會より招待せらるゝや今學院より森田一擁君出席し君一流の雄辯を振はれ都下の新聞に其の能辯を報導された又昨年十一月日蓮宗中學主催都下中學聯合懸賞雄辯大會には岡觀修結城瑞光の兩君出席された名譽(雄辯二月號所載)ある月桂冠を捷ち得た。猶猶本年五月神田明治會館に於いて日蓮宗中學の主催にかゝる聖誕七百年紀念全國中等學校雄辯大會には江原亮勇君が出席して同君獨特の富樓那辯を振はれ快採を博した。文化的要求に従つて膨脹して來た講演部が完全を期するには猶幾多の歲月 要するは勿論である、然し吾等は今後周到の注意を

拂ひ冷靜な理性の光明に照し眞理正義の勇者ととして雄辯を修練する覺悟でなければならぬ

□從來實地布教場へ選出した辯士の資格者は高等部を限られしが中等部五年級の眞摯なる要求に應じ山内布教の前講を許可す
□講演部の懇切なる依頼に應じ快諾せられたる諸先輩を名記すれば

六月日二 至言道尊 田中智學先生
七月十日 世界の大勢と尼港問題

七月廿三日 一週間講習會林 風宣僧正
十一月十日 祖山へ希望 清水龍山僧正

同 思想の歸結と合せ鏡 長尾榮進師

二月十六日 思想問題と日蓮聖人 清水麗昇師

三月廿四日 神州民の使命大迫陸軍大將 天恩無窮 本田仙太郎氏

立正安國論の運動 飯田蓮藏氏

右の方々に對して深く感謝す講演部の報告

として諸君の活勝を詳記せねばならぬのであるが千變一律式の報導では事足らず將來内外共に充實した實質を發表する事を欣懐とする (丁生)

運動部から

今や盛んに富士、アルプスなどの山岳踏破を企て江湖海上に短艇游泳を競ひ各種の運動は國內を狭しとして外國に發展し堂々と國際的競技に加はつて大に其の覇を争ふ様になつた勇壯なる國民の意氣は斯ふ云ふ處に發揮せらるゝと同時に健全なる体軀と精神との所有者は斯うして造りおげられる。何事をするにも身体が基礎となることはいふ迄もないが常に部屋の中で青白い顔をして黙まつて居る様では身体が脆弱になり意氣は消沈してしまふばかりである殊に青年として之ほど衰はない、やはり筋骨逞しい黒い顔が現代の國家にも宗門にも要求せらるゝ顔であらふと思ふ、この意味に於て大いに運動をやるべきである、獎勵するのを待つて仕方なしの運動では餘り其好果がな

い、吾祖山でも自發的な運動家を望んでゐる目下進取的の國運に際し吾々は最も大きな使命を帯びてゐる其責任の重大な事は一日も忘れてはならぬ宗祖の御理想の萬分の一なりと果さうとしたならばどうして纖弱な体で居られよう須く大智徳勇健でなければならぬ獅子王の如くならねばならぬ、萬難に打勝つた本化の大丈夫こそ男の中の大男ではないか。マアこんな考へは全員諸君殆んど御同様であらうが吾々はそれをお互に体現せん事を切望するものである、それにつけても我運動部は情けない様な感がせぬでもない、表面から見るといかにも其發展振りを見せずに現狀維持の様に見へるけれども其實日に月に發展してゐるのであるより以上發展をしようと思ふが、何しろる財政の問題やら、周圍の關係上止むを得ない實に今の我部は手も足も思ふ様に出せないといふ鹽梅、然し此儘で續けて行く事は出來ないが「伸びんと欲して先づ屈せよ」の筆法で、今のところ、實は其發展策に頭痛を病んでゐる譯である殊に運動場設置、寄

宿舍の新設等は昨年六月下旬の學生大會で大分騒々しい問題を起して當局に肉迫し其設置等を促したが、種々な事情のもとに未だ其實現の全きを見ないが其の端緒はすであらはれかけてゐる ▲去年の四月から運動部としては大した仕事もないが鐵棒の修繕や遊動木の新設等である、庭球は八、九、十月頃は殆んどテニス狂ともいふべき有様で雨の降らない日は毎日ホルルの音が絶へなかつたそれで其庭球がチャン運若干名の専用物の様になつてテニスをやらない人には一向趣味がない、なるべく會員一般に興味を持たせたいといふのは常から言つてゐた事であるこんな具合であるからホルルの使用は夥しく多かつたそれは運動のため寧ろパンクも結構だが裏の竹藪へ脱線させて知らん顔の人もある、それがため會員の一部からは不平も起き小言も出たが全く無理ならぬ事と思ふ▲弓術の場所のせいかな矢の籬入りを勘定してか、サツパリ振はな

いそれにつけても大いに射士の奮發を希望して止まないのである▲擊劍などは五六の人が時々、間の抜けた様な木刀の音ばかりそれも今は昔さへせぬ有様▲五月十五日より會則第十條に準じて五泊六日の豫定で伊豆伊東方面に聖跡參拜を行なつた、兼れて箱根山踏破も試みた旅行中夜間の道路布教は非常なる好成績を修めた(委細は記事中にあり)▲十一月七日校旗樹立式を兼ねて陸上大運動會を校庭で開催した午前八時祖師堂にて嚴かな樹立式法要があつた、終つて院長祝下より親しく校旗の授與あり校旗々手として小阪田龍教君が奉持し護衛には各級々長を以てし隊伍整々校庭に進み學生全部校旗に對して最敬禮を行ひ今日只今より祖山健兒のシンホルとして堅い誓を立てた、尙身延青年團總代として遠藤久雄氏の祝詞の朗讀があつて樹立式は終つた、續いて遠藤運動部長の開會の辭あり午前十時青空に響く銃聲の一發と同時に運動會の火蓋は切られたのである、觀客は極めて少數であつたが潑刺なる健兒の意氣は高い秋の空を衝かん勢ひにてプログラムの通り競技は進行した、ユニフォームに各自思ひ／＼の

マークを輝かし殊に五年級の勇敢ある樂隊の音律と會報所から發行する記事や漫畫は此日の呼物であつた午後になつて漸く混雜して來た午後の競技は觀客の叫びやら管絃樂のコーラスやらで非常に盛大になつて來た、大きな男が倒れたり走つたり亦無邪氣な可愛らしい小學生の遊戲等があつた最後に異裝百出の假裝行列には御臍の宙返り觀客は百雷の響く様な叫びをあげて御山が震へる程だつた午後五時御眞骨前で紀念撮影があつて萬歳三唱して散會を告げた▲尙今後當部の希望としては澤山あるが主なるもの運動場の設置が一番の急を要する仕事それにつれて基本体操の實施、出來得るならば体操を正科にして欲しい、やつぱり一應「氣を付け」や行進などはやるべしと思ふ、それは一寸した集合でも其心得がないから不体裁で仕方がない、他から見て全く見苦しい亦自分でも氣持が悪いと思ふ細目に渡れば種々あるがこれ位にして置かう宗教學校だから、僧院生活をしてゐるがら、そんな運動は不必要だ、などいふ人は運動の價

値を解しない人であるまいか、要するに吾々は太りに食ひ、太りに學び、大いに運動すべきである、寧ろこれ等が吾々學生時代の急務で体を壯健にするといふのも嚴な報恩生活の一分である (TK生)

金品寄贈者芳名

次第不順

大正八年度

一金壹圓	學院	大澤	支章殿
一金壹圓	同	高瀬	教團殿
一金壹圓	同	伊藤	海開殿
一金壹圓	同	泉	義敬殿
一金壹圓	同	森	亮遠殿
一金參圓	神戸市	菊地	泰旭殿
一金貳圓	本院	太田	日定殿
一金貳圓		小林	かめ殿
一金貳圓		木村	かれ殿
一金參圓	鎌倉	貝山師外四名殿	
一金五圓	東京	景山	佳雄殿
一金五圓	東京市	加藤安四郎殿	

一金貳圓	小林	殿
一金壹圓五拾錢	學院	結城 瑞光殿
一金貳圓	同	遠藤 是妙殿
一金拾圓		高倉 さよ殿
一金五圓		田中 いそ殿
一金五圓		八木 讀賢殿
一金壹圓	甲府市	山岡 義哲殿
一金貳圓	本院	太田 日定殿
一金貳圓	興津	藤田 東撰殿
一金拾圓	學院	故服部慈海殿
一金壹圓		實家 是俊殿
一金拾圓	學院	教師課一同殿
一金壹圓	山梨縣	奥野 要山殿
一金貳圓	學院	藤田 光肇殿
一金五圓	横濱市	加藤 あさ殿
一金壹圓	東京市	猪口 海靜殿
一金五圓	秋田縣	藤田 玄通殿

大正九年度 自四月至大正十年一月

一金五圓	東京市	阿部 むめ殿
一金五圓	同	布施 りう殿
一金參圓	佐賀縣	前田 龍存殿

一金五圓	佐賀市	久富	きよ殿
一金參圓	東京市	景山	堯雄殿
一金參圓	學院	堀	龍淳殿
一金拾五圓	靜岡縣	田中	智學殿
一金參圓	學院	水野	潮音殿
一金貳圓	山梨縣	內藤	善清殿
一金五圓	東京市	田村	日鳳殿
一金五圓	山梨縣	深澤	洪然殿
一金五圓	北海道	高木	きく殿
一金壹圓	山梨縣	坂本	玄善殿
一金壹圓	學院	宇田川	鍊要殿
一金壹圓	山梨縣	佐野	嘉重殿
一金五圓	東京市	清水	龍山殿
		外五名	
一金貳圓	靜岡縣	望月	宗康殿
一金貳圓	學院	水野	潮音殿
一金五圓	大阪府	森	亮遠殿
一金參圓	東京市	景山	堯雄殿
一金貳圓	本山	太田	日定殿
一金五圓	山梨縣	大林房	遺弟殿
一金參圓	學院	小川	友章殿

大正春季修學旅行隊
九年

金品寄附者御芳名

一金五圓	本學院	院長	現下殿
一金參圓		平林	秀光殿
一金貳圓		沼津	妙海寺殿
一金拾圓		玉澤	妙法華寺殿
一金參圓			妙國寺殿
一金參圓		伊東	朝光寺殿
一金五圓		同	佛現寺殿
一金五圓		同	前田龜吉殿
一金五圓		沼津	妙海寺殿
同上		同	妙覺寺殿
一泊同上		玉澤	妙法寺殿
一泊	伊東寺院	御一	同殿
一泊	伊東	前田	龜吉殿
一泊	小田原寺	院御一	同殿
一茶葉	箱根	本迹	寺殿
一泊	三島	妙行	寺殿
一辨當		富士皇國殿	

大正秋季陸上運動會
九年

金品寄附者御芳名

一金拾五圓	本院	殿
一金拾圓	院長	現下殿
一金五圓	關本	教頭殿
一金五圓	大野	會計殿
一金參圓	脇本	執事殿
一金參圓	杉本	執事殿
一金參圓	小松	執事殿
一金九圓	教師	課御一同殿
一金五圓	覺林	坊殿
一金五圓	武井	坊殿
一金五圓	玉屋	殿
一金五圓	新玉	屋殿
一金五圓	橋本	千代殿
一金參圓	支院	中殿
一金參圓	身延	青年團殿
一金參圓	村松	支由殿
一金貳圓	清水	坊殿
一金貳圓	田中	屋殿
一金貳圓	富士	皇國殿

